

史跡本願寺境内・

平安京左京七条二坊六町（東市）跡

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡本願寺境内・

平安京左京七条二坊六町（東市）跡

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、これまでに多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた古都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様へ京都の地域の歴史に対し関心を深めていただけるよう努めております。

当研究所では、平成 13 年より個々の発掘調査の概要をまとめた報告書を刊行しており、その成果を公表しています。

このたび、建物建替えにともなう史跡本願寺境内・平安京跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきましてご意見、ご批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際してご協力ならびにご支援たまわりました関係者各位に厚く感謝し、お礼申し上げます。

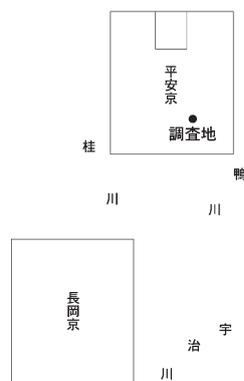
平成 20 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊六町（東市）跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市下京区堀川通花屋町下る本願寺門前町地内 |
| 3 委 託 者 | 宗教法人 浄土真宗本願寺派 代表役員 不二川公勝 |
| 4 調査期間 | 2007年8月13日～2008年3月28日 |
| 5 調査面積 | 400 m ² |
| 6 調査担当者 | 木下保明 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「島原」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前につけた。 |
| 13 遺物番号 | 挿図順に通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 14 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子 |
| 15 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 16 本書作成 | 木下保明 |
| 17 編集・調整 | 児玉光世・近藤章子・山口 眞 |



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	1
2. 遺跡の位置と環境	2
(1) 位置と環境	2
(2) 周辺の調査	3
3. 遺 構	4
(1) 遺構の概要	4
(2) 1区の遺構	4
(3) 2区の遺構	10
(4) 3区の遺構	10
4. 遺 物	11
(1) 遺物の概要	11
(2) 土器類	11
(3) 瓦類	19
(4) 金属製品	26
(5) 石製品	27
(6) 土製品	27
5. ま と め	28

図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区北部	平安時代末期から室町時代（北から）
		2	1区北部	桃山時代末期から江戸時代前期（南西から）
図版2	遺構	1	1区全景	江戸時代中期から後期（北から）
		2	土坑22	遺物出土状況（北東から）
図版3	遺物	土器類		
図版4	遺物	土器類・金属製品・石製品・土製品		
図版5	遺物	鬼瓦・軒瓦類		
図版6	遺物	軒端瓦・刻印瓦		

挿 図 目 次

図1	調査前全景（北西から）	1
図2	作業風景	1
図3	調査位置図および周辺調査（1：2,500）	2
図4	調査区配置図（1：500）	4
図5	1区中央セクション断面図（1：50）	5
図6	補足調査区南壁断面図（1：50）	5
図7	遺構平面図〔平安時代末期から室町時代〕（1：100）	6
図8	溝31断面図（1：50）	7
図9	井戸49実測図（1：50）	7
図10	遺構実測図〔桃山時代から江戸時代〕（1：200）	8
図11	建物2柱穴7断面図（1：50）	9
図12	土坑22断面図（1：50）	9
図13	土坑22遺物出土状況図（1：50）	9
図14	2区北壁断面図（1：50）	10
図15	3区北壁断面図（1：50）	10
図16	出土土器実測図1〔古墳時代〕（1：4）	12
図17	出土土器実測図2〔平安時代末期から鎌倉時代〕（1：4）	12
図18	出土土器実測図3〔室町時代から桃山時代〕（1：4）	13
図19	出土土器実測図4〔江戸時代中期から後期〕（1：4）	14
図20	出土土器実測図5〔江戸時代中期から後期〕（1：4）	15
図21	出土土器実測図6〔江戸時代中期から後期〕（1：4）	16
図22	出土土器実測図7〔江戸時代中期から後期〕（1：4）	17
図23	出土土器実測図8〔江戸時代後期〕（1：4）	18
図24	鬼瓦、軒丸瓦拓影・実測図（1：4）	20
図25	隅軒丸瓦拓影・実測図（1：4）	21
図26	軒平瓦拓影・実測図（1：4）	22
図27	軒端瓦、丸瓦拓影・実測図（軒端瓦1：6、丸瓦1：4）	23
図28	平瓦、熨斗瓦拓影・実測図（1：6）	24
図29	刻印瓦拓影・実測図（1：4）	25
図30	金属製品、石製品、土製品拓影・実測図（1：4、1：1、1：2）	27

表 目 次

表 1	周辺調査一覧表	3
表 2	遺構概要表	4
表 3	遺物概要表	11

史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊六町（東市）跡

1. 調査経過

（1）調査に至る経緯

本調査は、親鸞上人七百五十回大遠忌の記念事業として実施される本願寺の参拝部棟の建替えに伴う発掘調査である。調査地は、史跡本願寺境内の御影堂の南側、平安京左京七条二坊六町（東市）にあたっており、関連の遺構の検出が期待された。発掘調査に先立って、建設予定地の現代層を重機によって掘削・除去し、遺構の残存状況を確認する試掘調査を実施した。その結果、遺構が良好な状態で残存していることが判明したので、京都府教育庁指導部文化財保護課・京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導のもと、発掘調査を財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施することになった。

（2）調査の経過

調査は2007年8月13日より準備作業を開始し、江戸時代後期の整地層を掘り下げ、寛永年間の御影堂再建時の整地層上面での調査を実施した。あわせて、特別史跡虎渓の庭と調査区の間で2箇所の試掘トレンチ（2・3区）を設け調査を行った。その結果、江戸時代中期の集会所の建物のものと考えられる礎石据付け穴、井戸、土坑などを検出した。これらの遺構は本願寺の歴史を知るうえで重要な遺構であると判断し保存するようにとの指導がなされたため、建物の設計を変更することになり、発掘調査の途中であるが9月12日に一旦調査を中断することになった。

2008年になって設計変更案がまとまり、江戸時代中期の集会所の遺構については全面保存のため、調査もそこまでの記録を作成することとし、一部保存が不可能な箇所について、3月10日から補足調査を実施した。調査終了にあたり、保存箇所については遺構面に真砂を約20cmの厚さに敷き詰めて、遺構の保護を図った。すべての調査は3月28日に終了した。



図1 調査前全景（北西から）



図2 作業風景

2. 遺跡の位置と環境

(1) 位置と環境

調査地は、本願寺の御影堂の南側に位置する。本願寺は、天正十九年（1591）に豊臣秀吉から寄進された七条堀川の土地に、大坂天満から移転し阿弥陀堂などの諸堂宇が整備されていく。慶長元年（1596）の大地震によって倒壊するが、翌年には復興する。しかし、元和三年（1617）の火災によって阿弥陀堂・御影堂などが焼失した。翌元和四年に仮御堂・阿弥陀堂などが再建された。寛永十三年（1636）に現在の御影堂が造られた。元和四年に造られた阿弥陀堂は西山別院に移され、新たに宝暦十年（1760）に現在の阿弥陀堂が造られている。

調査地には、当初建物は築かれなかったが、宝暦十年に阿弥陀堂が再建されるのに先立ち、阿弥陀堂の北から御影堂の南側に寛延四年（宝暦元年・1751）に集会所（仮阿弥陀堂、梁行十間・桁行十二間）が改築された。これは後に「虎の間」、「新虎の間」と呼称を換えながら建替え・修復を重ねながら旧参拝部棟へと受け継がれていく。

また、調査地は平安京の南西辺の平安京左京七条二坊六町、東市の市町の南東の町にあたる。

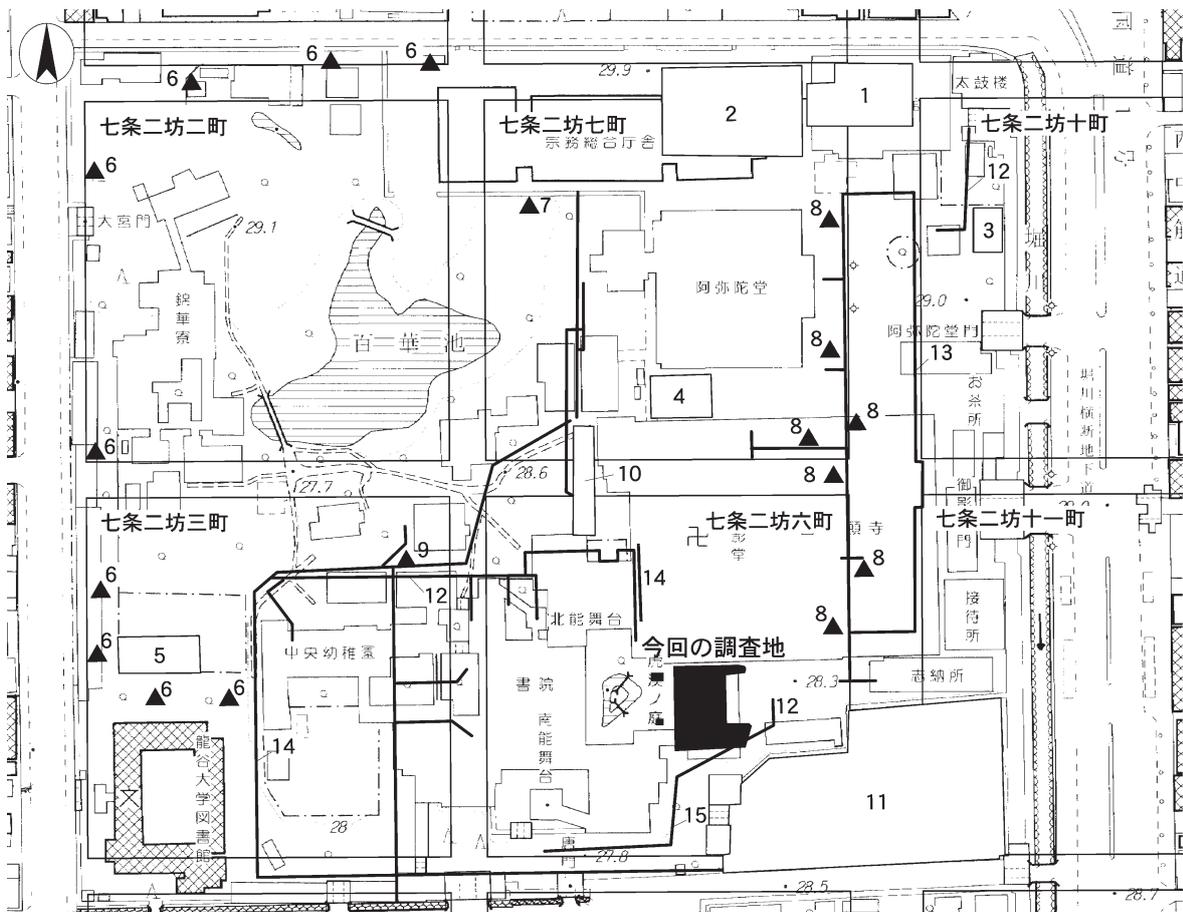


図3 調査位置図および周辺調査（1：2,500）

(2) 周辺の調査 (表1・図3)

本願寺の境内では、今回の調査を含めて23次におよぶ発掘・確認・試掘・立会調査を実施している。主な調査について位置とその概要を図3・表1に示した。以下に、本願寺に関連する遺構を検出した調査の概要について述べる。

No.1の調査では、庭園跡を検出した。この庭園は、教如が隠居した屋敷に造られた池と考えられる。No.3では江戸時代の井戸を検出した。No.4の調査では、創建当初の池と元和の火災以降に造られた池を検出した、新しい方の池には橋脚が架けられていた。No.5では本願寺境内と町屋を区切る南北の溝、No.6では江戸時代後半の濠を検出している。No.11は名勝・滴翠園の整備工事に伴う調査で、旧醒眠泉・滝石・導水路・船着場・護岸などの遺構を検出し、造営当初から現代にいたるまでの変遷の一部を明らかにすることができた。No.14の調査では、江戸時代の溝・暗渠・柱穴・土坑などを検出している。

表1 周辺調査一覧表

No.	調査方法	調査面積	調査年度	主な遺構	文献
1	発掘	602m ²	1999	平安時代後期の井戸・溝、室町時代の池・溝・流路、桃山～江戸時代初期の庭園	『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
2	発掘	1500m ²	1983	自然流路	『本願寺境内地発掘調査概要』
3	発掘	110m ²	2007	江戸時代の井戸	『史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊十町跡』
4	発掘	240m ²	2007	江戸時代前期の池(新旧2時期)	
5	発掘	313m ²	2006	平安時代中期の溝、平安時代後期～鎌倉時代の井戸、江戸時代前期～後期の井戸・土坑、江戸時代後期の建物	
6	立会	—	1981	江戸時代前期の溝	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和56年度
7	立会	—	1980	検出せず	
8	立会	—	1979	検出せず	
9	立会	—	1979	検出せず	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和54年度
10	確認	100m ²	2006	江戸時代中期の土塁	
11	試掘	—	1996～	旧醒眠泉、滝石、導水路、船着場、護岸	各年度の『京都市埋蔵文化財調査概要』
12	立会	—	1982	平安時代～室町時代の包含層・土坑	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度
13	立会	—	1983	平安時代の包含層・土坑	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和58年度
14	試掘・立会	—	2006	平安時代の柱穴・溝・土坑、鎌倉時代の溝、室町時代の井戸、江戸時代の溝・暗渠・土坑・柱穴	
15	立会	—	1981	江戸時代の包含層・路面	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和56年度

3. 遺 構

(1) 遺構の概要 (表2)

1区では、調査区の北辺と西辺は1972年の工事によって攪乱を受けて削平されており、江戸時代の遺構面は東半で高台状に検出した。また、攪乱の底部近くで、所々島状に中世の面が残存していた。検出した遺構は、補足調査区で平安時代末期から鎌倉時代の溝（平安京左京七条二坊六町を南北に二分する位置にある）、土坑、井戸、元和の火災時の焼土を含む処理土坑などを検出した。寛永十三年（1636）に御影堂が再建された整地面の上で建物・井戸・土坑・溝などを検出した。大半の遺構は保存を前提としているため、検出したままの状況で掘下げは行っていない。

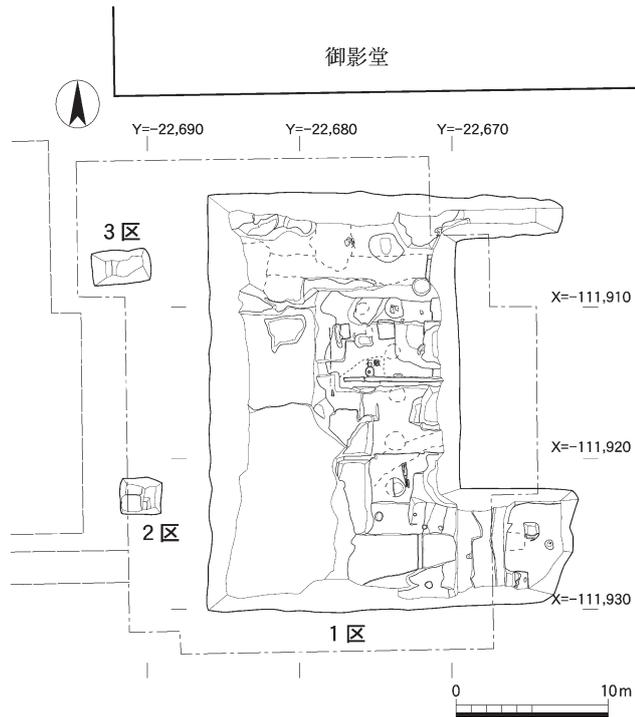


図4 調査区配置図 (1:500)

2・3区は、江戸時代の遺構面の有無と攪乱の範囲を確認するために設置した試掘トレンチである。2区では中世の面、3区では江戸時代の面を検出し、調査後、両区とも遺構面に真砂を敷き詰めて保護し、埋め戻した。

(2) 1区の遺構

1) 基本層序 (図5・6)

基本層序は、現代の盛土（旧参拝部解体後の埋め戻し土）、以下江戸時代後期の整地層である暗オリーブ褐色砂礫（図5-2）→にぶい黄褐色粘質土（図5-3）→褐色砂質土（図5-4）→にぶい黄褐色粘質土（図5-6）→黄褐色砂礫（図5-7）が順に堆積し、寛永十三年の御影堂再建時

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代末期 ～鎌倉時代	溝31、土坑44・46～48	
室町時代	井戸49	
桃山時代末期 ～江戸時代前期	土坑39～41、柱穴43	
江戸時代中期～後期	建物1～3、瓦列、土坑22、井戸34	

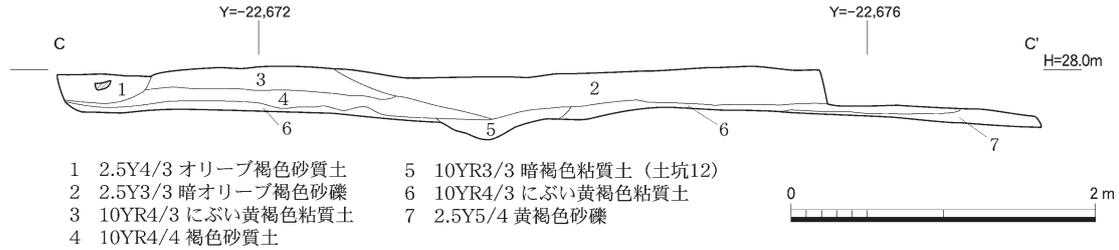


図5 1区中央セクション断面図(1:50)

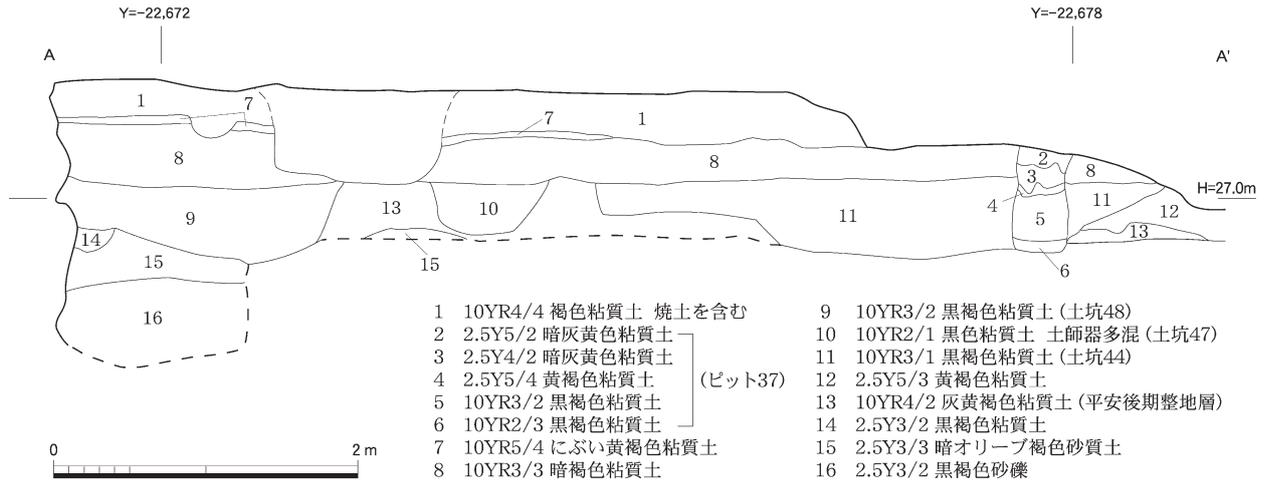


図6 補足調査区南壁断面図(1:50)

に整地されたと思われる褐色粘質土(図6-1)を検出した。整地層内に元和三年の火災の時に生じたとみられる焼土が含まれ、上面の一部では径1~2cm大の礫が搗き固められた石敷を確認している。この整地層の下に厚さ3~4cmのにぶい黄褐色粘質土(図6-7)、約30cmの暗褐色粘質土(図6-8)が堆積している。黒褐色粘質土に包含されるほとんどの遺物は鎌倉時代に属するが、16世紀後半の遺物も混じっている。したがって、この2層の堆積層は本願寺創建時の整地層だと考えられる。次に平安時代末期から鎌倉時代の遺構面となる。平安時代末期から鎌倉時代の遺構形成面の土層は土器の細片を含む灰黄褐色粘質土(図6-13)である。その下に暗オリーブ褐色砂質土(図6-15)・黒褐色砂礫(図6-16)が堆積している。黒褐色砂礫は平安京成立以前の自然流路の堆積層とみられ、層内から古墳時代前期の土師器が出土している。

2) 平安時代末期から鎌倉時代の遺構(図7、図版1-1)

おもに調査区北半の補足調査で検出した。

溝31(図8) 東西方向の溝である。調査区の全域で検出したが、調査したのは東半の約7mのみである。幅は1.7~1.8mで、深さは0.6~0.7mであるが、検出面と平安時代末期から鎌倉時代の遺構成立面で約0.3mの高低差がある。断面は台形で、埋土は黒褐色の粘質土を中心とする。土師器、須恵器、瓦器、中国製陶器の黄褐釉盤などが出土している。1町の南北の中心線より約0.9m北に南肩が位置することから、平安京左京七条二坊六町を南北に二分する区画溝と考えられる。

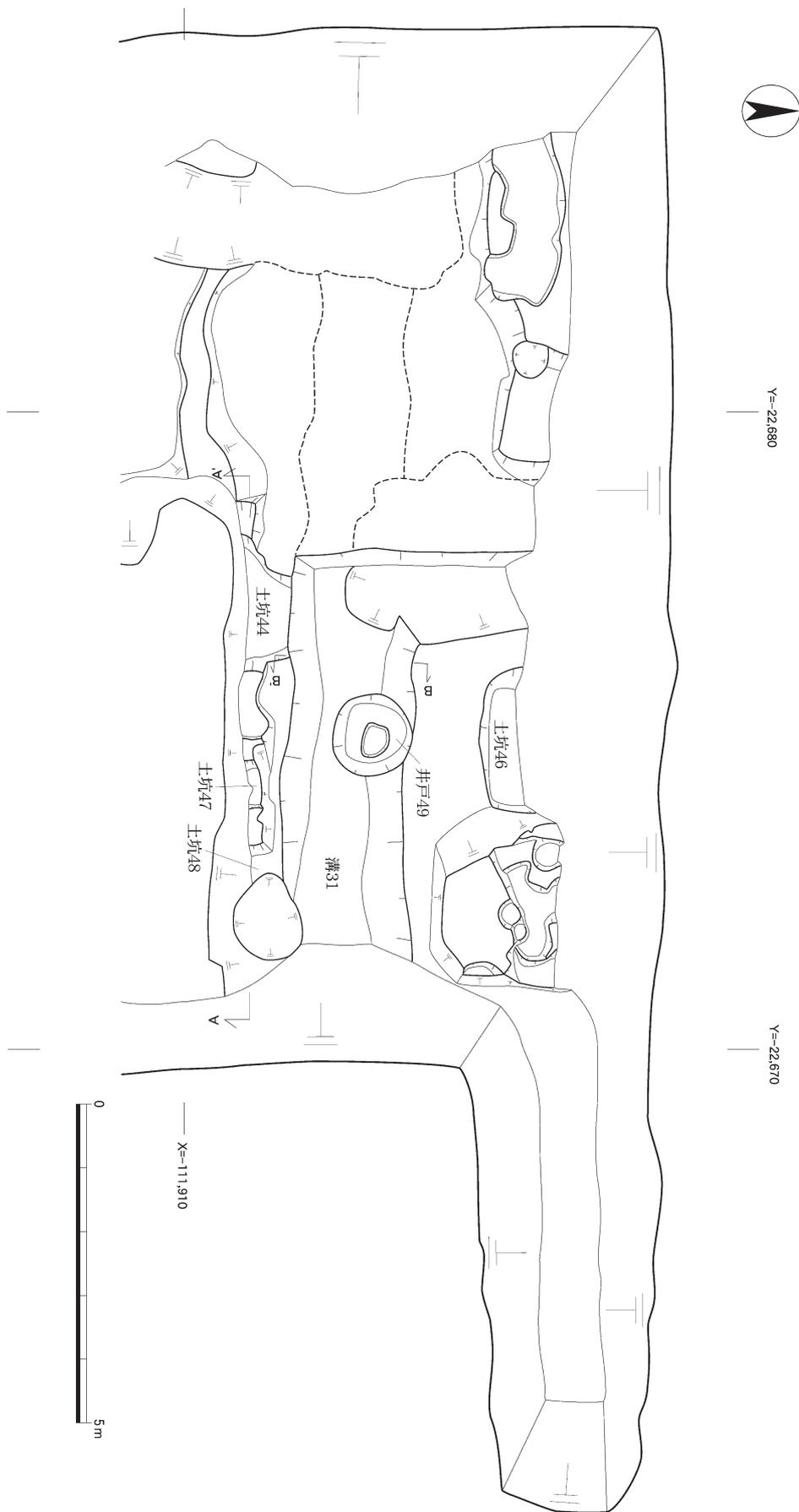


図7 遺構平面図 [平安時代末期から室町時代] (1 : 100)

土坑 44 北部を攪乱に破壊され南部は未調査のため、全体の形状・規模は不明である。東西幅は 3.8 m、深さは 0.5 m で、埋土は黒褐色粘質土である。

土坑 46 北側は調査区外にのびているため、全体の形状・規模は不明である。東西幅は 2.15 m、深さは 1.2 m である。埋土は上から暗褐色粘質土、黒褐色砂礫、暗褐色粘質土の順に堆積し、土師器・瓦器・焼締陶器などが出土している。

土坑 47 北部を攪乱に破壊され南部は未調査のため、全体の形状・規模は不明である。東西幅は 0.8 m、深さは 0.3 m で、埋土は黒色粘質土である。完形の土師器の皿が多く出土している。

土坑 48 北部・東部を攪乱に破壊され南部は未調査のため、全体の形状・規模は不明である。東西の現存幅は 2.0 m、深さ 0.5 m で、埋土は黒褐色粘質土である。

3) 室町時代の遺構 (図 7、図版 1-1)

井戸 49 (図 9) 径 1.25 m の円形の井戸である。底部に径 0.4 m 円形の掘込みを検出した。肩部に腐蝕した木質が認められ、曲物が据え付けてあったものと思われる。深さは 1.1 m で、埋土は 3~5 cm の礫が混じる黒褐色の粘質土で、曲物据付け部には黒色砂質土が堆積している。土師器、輸入青磁の椀などが出土している。

4) 桃山時代末期から江戸時代前期の遺構 (図 10、図版 1-2)

土坑 41 調査区の北西部で検出した溝状の土坑である。一部のみの調査で、ほとんど検出状態での観察であるが、南北方向の溝が西にほぼ直角に屈曲している。南北部の幅は約 1.5 m、東西部の幅は約 3.0 m、深さは 0.5 m 以上で、埋土は暗オリーブ褐色である。土師器、瓦器、焼締陶器、瓦などが出土している。16 世紀後半の遺物を包含し、本願寺創建の際に埋まったものと思われる。

土坑 39 調査区の北東部で検出した土坑である。西肩の一部を検出したのみであるが、東西幅は 6.5 m 以上になる。深さは 0.7 m 以上で、埋土は黒褐色土を中心に堆積し、焼土が多く含まれている。元和の火災時に生じた瓦礫を処理するために造られた土坑と思われる。出土した遺物の大半が瓦類で、他に唐津の椀、中国製の青花磁器の椀、銭貨(洪武通寶・至道通寶)などが出土している。

土坑 40 調査区の北辺中央部で検出した矩形の土坑である。南半部のみの検出で、東西幅は約

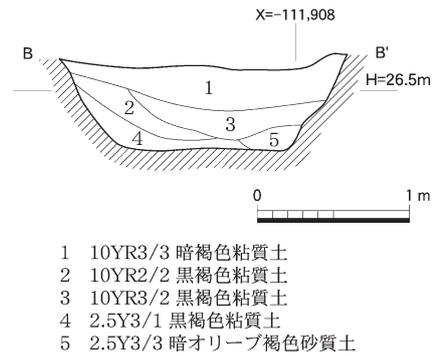


図 8 溝 31 断面図 (1 : 50)

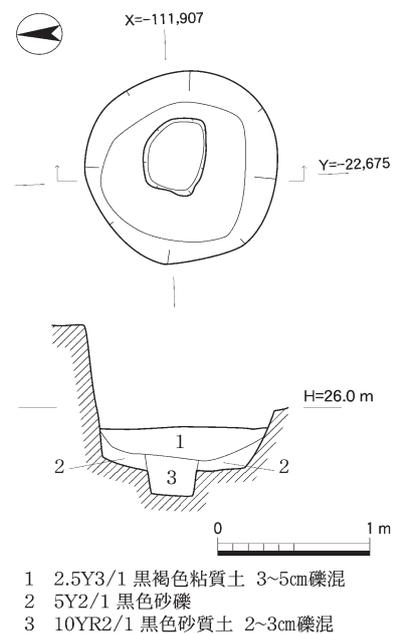


図 9 井戸 49 実測図 (1 : 50)

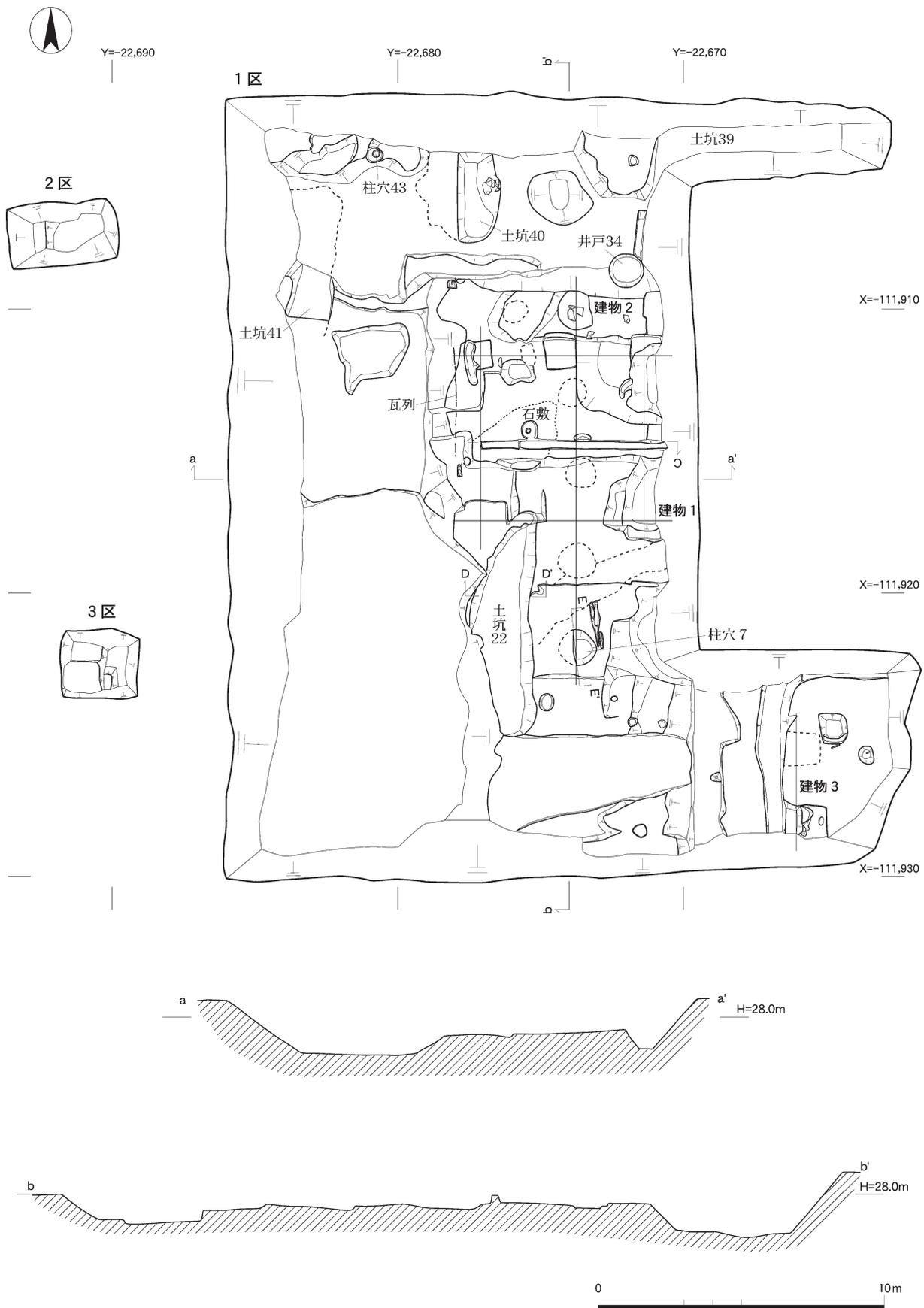


図10 遺構実測図 [桃山時代から江戸時代] (1:200)

2.5 mである。調査をしたのはその東半部で、深さは 1.0 mで、上から暗オリーブ褐色砂質土、暗褐色砂質土、黒褐色粘質土の順に堆積している。土坑 39 と同様に埋土に焼土が含まれており、元和の火災後の瓦礫処理土坑と考えられる。

柱穴 43 調査区の北西部で検出した柱穴である。径約 0.55 mで、深さは 0.5 m以上である。埋土はにぶい黄褐色砂質土で、土師器、獅子口瓦などが出土している。

5) 江戸時代中期から後期の遺構 (図 10、図版 2-1)

建物 1 調査区の中央部東辺で検出した建物である。方形の礎石の据付け穴をもつ建物は、東西 2 間以上 (芯々距離 3.0 m)、南北 1 間以上 (芯々距離 6.0 m) で、全体の構成・規模は不明である。礎石の据付け穴は方形で、一辺 1.0 ~ 1.4 mで、埋土は砂礫層とその上に土を被せて搗き固めたものの互層である。深さは北の列のものが深く約 0.5 m、南のものは 0.3 mである。

建物 2 (図 11) 調査区の中央部東辺で検出した建物である。円形の礎石の据付け穴をもつ柱列を 1 条、4 間分 (芯々距離 3.0 m) を検出した。据付け穴は径約 1.2 m、深さ 0.25 mである。埋土は、肩部を巻くようにシルト質の土を入れ、中を礫と瓦を含む砂質土で充填し、上面に礎石を水平に据えるための飼石に使用されたとと思われる花崗岩の割石を置いたものもある。建物になると思われるが、全体の構成・規模は不明である。

建物 3 調査区の南東部で検出した柱列である。方形の礎石の据付け穴を南北に 2 箇所 (芯々距離 3.0 m) 検出した。建物 1 とは並びがずれるので、別の構造物と思われる。一辺 1.3 ~ 1.5 mで、埋土は砂礫層とその上に土を被せて搗き固めたものの互層である。深さは南側のものが 0.5 mである。

瓦列 調査区の中央部で検出した瓦列である。側面を下にして垂直に立てた平瓦を南北方向に約 3.9 m並べている。瓦は幅約 0.15 m、深さ約 0.2 mの掘形をもった布掘り状の溝の中に設置されている。用途は不明である。

土坑 22 (図 12・13) 調査区の中央部で検出した土

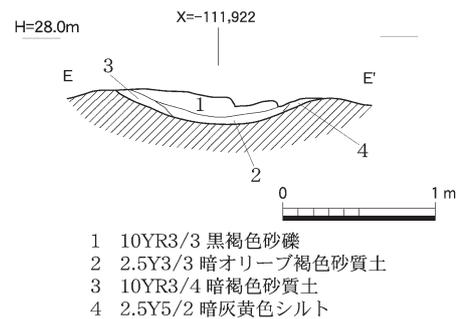


図 11 建物 2 柱穴 7 断面図 (1 : 50)

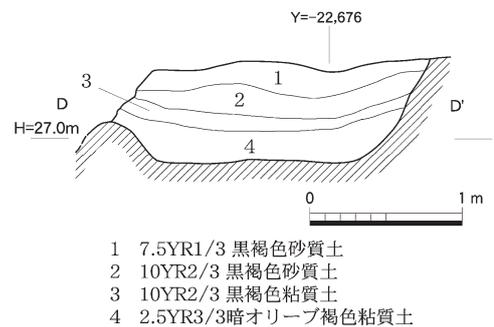


図 12 土坑 22 断面図 (1 : 50)

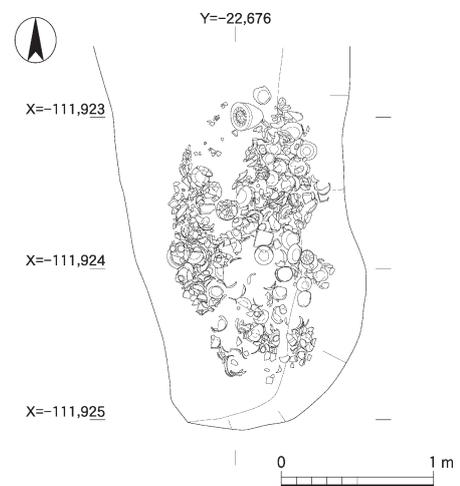


図 13 土坑 22 遺物出土状況図 (1 : 50)

坑である。南北方向に長軸をもち、北西隅は一段高く、東側は溝状に低くなる。長さ約 7.4 m、幅約 2.0 m、深さ 0.65 m である。埋土は黒褐色砂質土を中心に堆積している。瓦・土器などを廃棄した土坑で、南端では肥前磁器の染付が大量に出土し、土師器皿が 2～4 枚重ねられた状態で出土した地点も数箇所認められた。また、特異な遺物として瑪瑙の破片が出土している。方形の礎石の据付け穴を壊しており、建物 1 より新しい。

井戸 34 調査区の北東辺で検出した円形の井戸である。径 1.2 m、深さは約 2.0 m である。井戸枠はないが、湧水層の砂礫まで掘り込まれているので、井戸であると考えられる。井戸内に堆積土はほとんどなく、大量の瓦によって埋め戻されている。

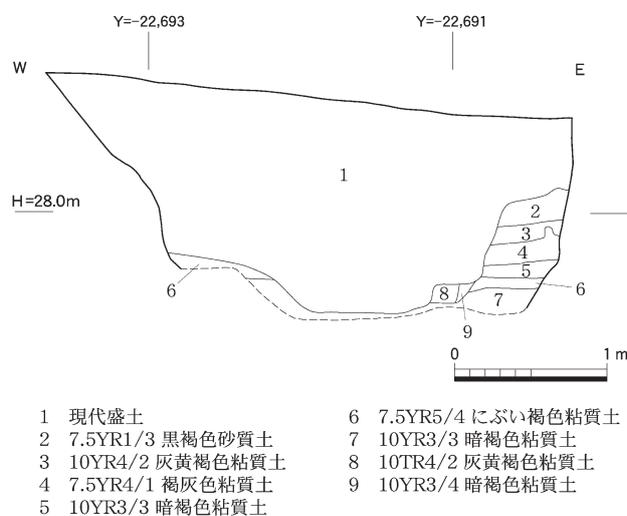


図 14 2区北壁断面図 (1:50)

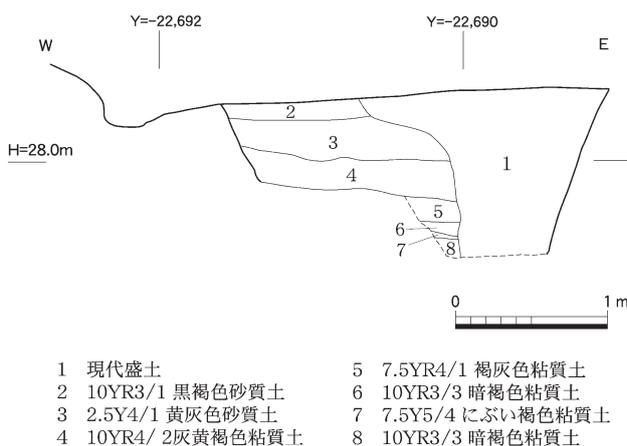


図 15 3区北壁断面図 (1:50)

(3) 2区の遺構 (図 10・14)

ほとんどが旧便所設置時に攪乱されており、西端と東端の断面の一部で江戸時代から中世の包含層が残存していたのみであった。

基本層序は、地表下 0.45 m が現代の盛土、次に江戸時代後期の黒褐色砂質土、灰黄褐色粘質土が堆積している。灰黄褐色粘質土の最下部に白色の漆喰が薄く堆積している。その下に元和の火災時に生じたと思われる焼土を含む褐灰色粘質土、暗褐色粘質土が堆積し、褐灰色粘質土の上面が 1 区の寛永時の整地面と対応し、標高は 27.80 m である。次に中世の遺物包含層であるにぶい褐色、暗褐色粘質土の順に堆積する。

(4) 3区の遺構 (図 10・15)

調査区の西半で江戸時代後期の遺構面を検出したが、遺構は検出されなかった。また、北半を断ち割って寛永時の整地層を確認した。

基本層序は 2 区と同様で、寛永時の整地面の標高は 27.77 m である。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要 (表3)

今回の調査で出土した遺物は、遺物整理箱で36箱ある。大半が土器・瓦類で、石製品、金属製品、銭貨、土製品などが混じる。

古墳時代前期の土師器は、庄内併行期のもので甕・器台などがある。

平安時代の遺物には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入磁器、鬼瓦などがあるが、すべて二次堆積である。

平安時代末期から鎌倉時代の遺物には、土師器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器、瓦などがある。

江戸時代の土器類のうち約半数は土坑22から出土したもので、うち約9割を肥前磁器の染付の椀・皿が占める。他に施釉陶器の椀・急須・燈火具、土師器の皿、土師質土器の花焼塩壺・燈火具などがある。瓦類には軒丸瓦、軒平瓦、獅子口、烏衾、熨斗瓦、平瓦、丸瓦があり、刻印・ヘラ描きを有する瓦も出土している。

(2) 土器類 (図16～23、図版3・4)

1) 古墳時代の土器類 (図16)

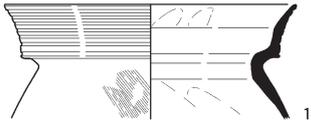
暗褐色粘質土出土の土器(1) 二重口縁をもつ甕である。口縁上半は大きく外反し、端部は丸くおさまる。口縁部外面には櫛描き凹線がめぐり、内部には指頭圧痕が認められる。体部の外面はハケ調整、内面はケズリを施す。胎土中に長石・石英などの砂粒を含み、焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器、須恵器		土師器5点		
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦		鬼瓦1点		
平安時代末期～鎌倉時代	土師器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦器、瓦、石製品、土製品		土師器15点、瓦器4点、石製品1点、土製品1点		
室町時代～江戸時代前期	土師器、焼締陶器、施釉陶器、輸入磁器、瓦、銭貨		土師器4点、土師質土器1点、瓦11点、銭貨2点		
江戸時代中期～後期	土師器、土師質土器、施釉陶器、軟質施釉陶器、磁器、焼締陶器、瓦、金属製品、銭貨、石製品、土製品		土師器2点、土師質土器1点、施釉陶器14点、軟質施釉陶器1点、磁器61点、瓦22点、金属製品1点、石製品1点		
合 計		47箱	148点 (11箱)	36箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より11箱多くなっている。

暗褐色粘質土



黒褐色砂礫

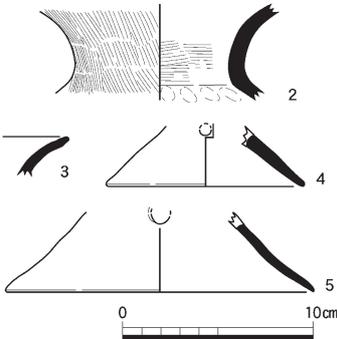


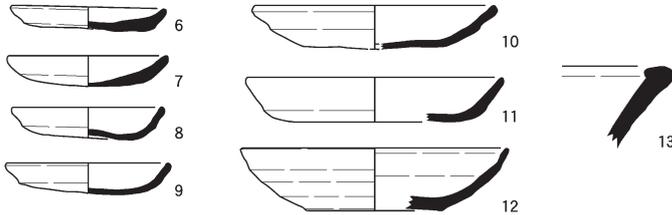
図 16 出土土器実測図1
[古墳時代] (1 : 4)

黒褐色砂礫出土の土器（2～5） 2は壺の口頸部である。外面は左上りのハケ調整、内面は横方向のハケ調整を施す。頸と体部の境に指頭圧痕が認められる。胎土中に長石・石英・雲母などの砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。3は甕の口縁部であるが、小片のため口径の復元はできない。ナデによる調整を施す。横方向のハケ調整を施す。頸と体部の境に指頭圧痕が認められる。胎土中に長石・石英などの砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。4・5は器台の脚部である。脚端部はナデ調整を施すが、他は磨滅が激しく詳細は不明である。ともに円孔を穿つ。胎土中に長石・石英などの砂粒を含み、焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。

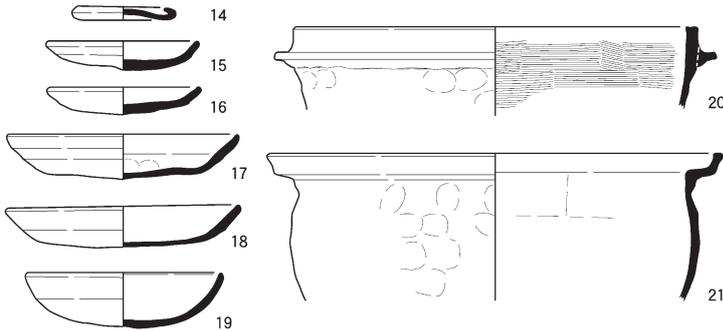
2) 平安時代末期から鎌倉時代の土器類 (図 17)

溝 31 出土の土器 (6～13) 6～12は土師器の皿である。6～9は口径 7.8～8.45 cm、器高 1.5～1.65 cmの小型で扁平な皿、10・11は復元口径約 13 cm、復元器高約 2.5 cmの大型の皿である。平らな底部から内湾しながら短く外上方に口縁部がのびる。口縁端部は丸味をおびる。口縁部は

溝31



土坑47



暗褐色粘質土

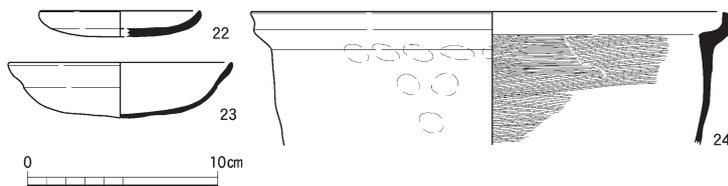


図 17 出土土器実測図2 [平安時代末期から鎌倉時代] (1 : 4)

1段ナデ、内底面は仕上げナデを施すが、底部は無調整である。胎土中に長石・石英などの砂粒を含み、焼成は良好で、色調は6は浅黄橙色、8は橙色、他はにぶい橙色を呈する。12はロクロ成形で、底部はヘラ切り痕を残す。胎土中に長石・石英・雲母などの砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。

13は瓦質の鉢である。口縁端部を内面に折込んで、内面を有段にする。ナデ調整を施す。小片のため口径の復元はできない。胎土中に長石・石英・雲母などの砂粒を含み、焼成は良好で、色調は灰色を呈する。



図 18 出土土器実測図 3 [室町時代から桃山時代] (1 : 4)

土坑 47 出土の土器 (14～21) 14～19 は土師器の皿である。14 は口縁部を内面に折り曲げたいわゆる「コースター」形の小型の皿である。口縁部と内面はナデ、内底面は仕上げナデを施すが底部は無調整である。15・16 は口径 7.8 cm の小型の皿、17・18 は口径 12.0 cm の大型の皿である。19 は白色系の皿である。胎土中に長石・石英・雲母などの砂粒を含み、焼成は良好で、色調は 15 は浅黄橙色、他はにぶい橙色を呈する。

20・21 は瓦質土器である。20 は羽釜で、罅部から短く口縁部が立ち上がる。口縁部はヨコナデ、内面は粗いハケ調整を施す。体部外面に指オサエ痕が残る。21 は鍋で、頸部外屈、口縁部が上方に立ち上がる。口縁部はナデ、内面は粗いハケ調整を施す。体部外面に指オサエ痕が残る。

暗褐色粘質土出土の土器 (22～24) 22 は小型の土師器の皿、23 は白色系の皿である。24 は瓦質の鍋である。

3) 室町時代から桃山時代の土器類 (図 18)

井戸 49 出土の土器 (25・26) とともに白色系の土師器の皿である。25 は口縁端部が立ち上がり、口縁内部に浅い凹部ができる。26 は底部にたいして口縁部が大きく広がる。内面と口縁部外面はナデ、体部は無調整である。胎土は密で、長石・石英・雲母などの砂粒を含み、焼成は良好である。

土坑 41 出土の土器 (27・28) 27 は土師器の皿で、丸底気味の底部から口縁部が外上方にのびる。口縁部と内面はナデ、内底面は仕上げナデを施すが、他は無調整である。胎土中に長石・石英などの砂粒を含み、焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。

28 は土師器の焙烙である。口縁部は外上方にのび、口縁端部は外傾する。口縁部と内面はヨコナデ調整を施し、体部外面に指オサエ痕が残る。

暗褐色粘質土出土の土器 (29) 土師器の皿である。底部から外上方に口縁部がのびる。口縁端部は丸味をおびる。口縁部と内底面はナデ調整を施すが、底部は無調整である。胎土中に長石・石英などの砂粒を含み、焼成はやや不良で、色調は灰黄色を呈する。

4) 江戸時代中期から後期の土器類 (図 19～23)

土坑 22 出土の土器 (30～107) 30・31 は土師器の皿である。丸底気味の底部から口縁部が外上方にのびる皿である。口縁部と内底面の境に圈線がめぐる。口縁部・内面はヨコナデ、口縁部下半は指オサエ、内底面は仕上げナデを施す。どちらも胎土精良・焼成良好で、色調は浅黄橙色を呈する。

32～42 は京・信楽系の施釉陶器である。32 は灯明受皿である。ロクロ成形で、口縁部・内面

土坑22

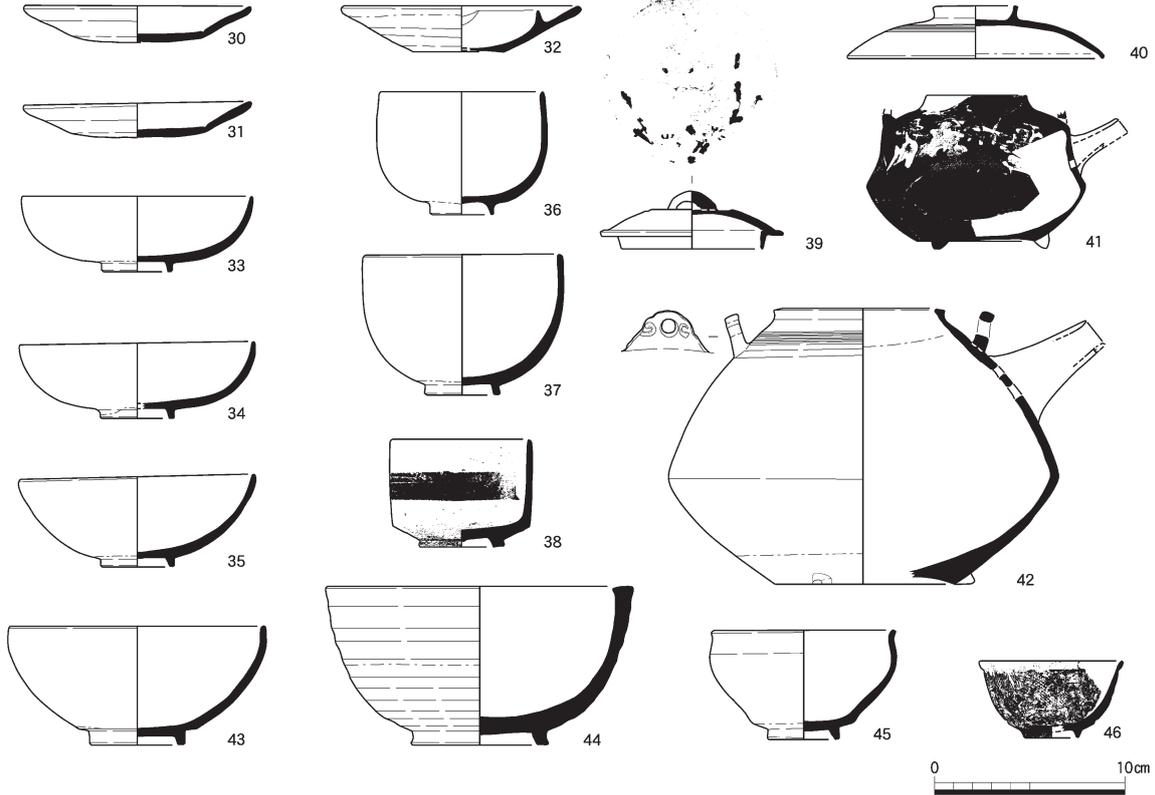


図 19 出土土器実測図 4 [江戸時代中期から後期] (1 : 4)

に明オリーブ灰色の釉を施す。33～35は平椀で、高台部を除いて灰白色の釉を施す。36～38は筒型椀で、36・37は高台部を除いて明オリーブ灰色の釉を施す。38は胴部に1条の帯状のサビ絵を描く。39・40は急須の蓋である。39はサビ釉、青・白彩で天井部に梅樹を描いている。40は天井部中央に環状のつまみをもち、その回りに沈線を巡らせる。明緑灰色の釉を施すが、口縁端部は無釉である。41は急須で、体部が内側に凹み、平坦な底部をもつ。肩部に黄・青・緑彩で風景文が描かれる。底部に「洛東山」銘の印が押される。42は鉄釉の土瓶で、底部を除いて褐色の釉を施す。そろばん玉形の体部をもち、底部はあげ底気味に内部に突出する。

43～45は美濃・瀬戸系の施釉陶器である。43は美濃系の施釉陶器の椀である。口縁部が内側に折れ曲がるいわゆる「束口」の椀である。黄橙色の器地の上に、内外面とも白色の刷毛目文を施す。44は小型の鉢で、内面・体部上半に灰オリーブ色の釉が施される。内底面にトチンの目跡が残る。45は美濃・瀬戸系の鉄釉を施したいわゆる「天目」の椀である。

46は京焼系の軟質施釉陶器である。型押し成形で外面に草花文を施し、内外面に赤色の顔料を塗布している。

47～100・102～107は肥前磁器の染付である。47～53はいわゆる「そば猪口」と呼ばれる筒形椀である。47～49は体部直下に短い釉剥ぎの高台が付き、外面に松竹梅を描く。50～53は底部が蛇の目釉剥ぎの高台をもつ。50は外面に松原を描き、下部は2条の沈線を廻らせる。口縁部内面に列点文を描く。内底面には二重圏線の中に五弁花文が描かれる。51は外面に松原、下部には角張った蓮華文帯を描く。内底面には二重圏線の中に環状の松竹梅繫文が描かれる。底

土坑22



图 20 出土土器実測図 5 [江戸時代中期から後期] (1 : 4)

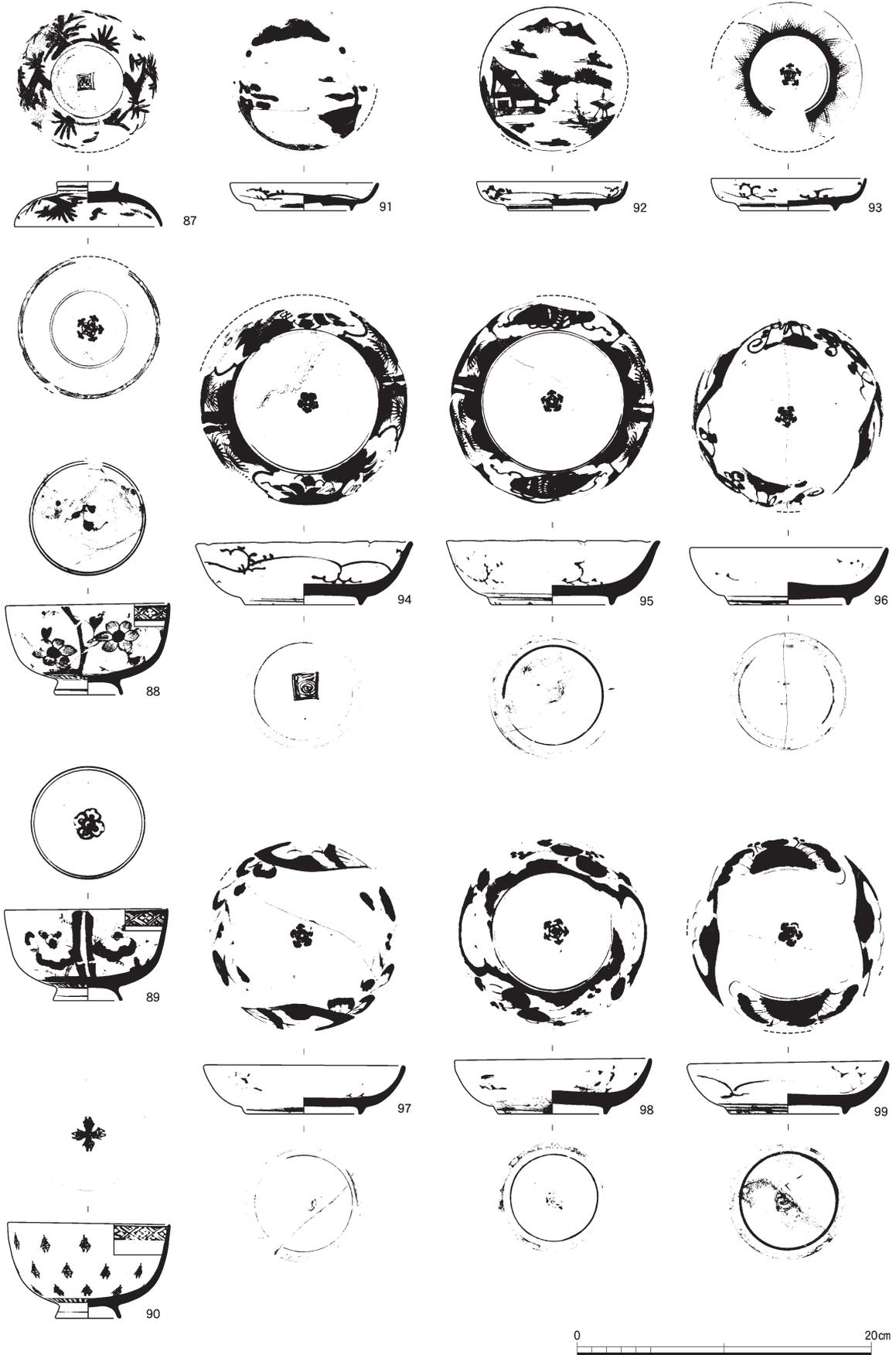


図 21 出土土器実測図 6 [江戸時代中期から後期] (1 : 4)

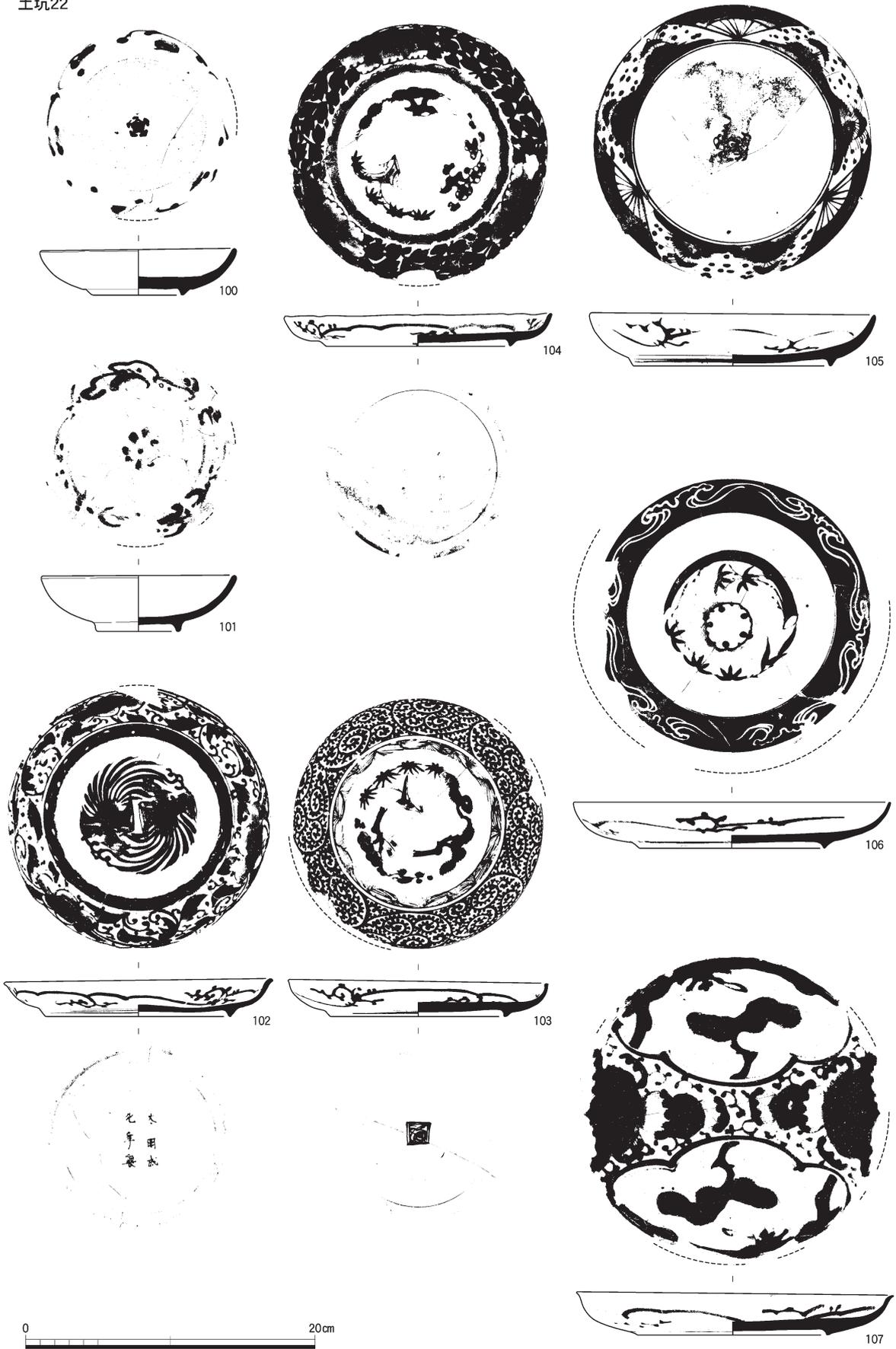


図22 出土土器実測図7 [江戸時代中期から後期] (1:4)

部は蛇の目釉剥ぎの高台である。52は縦縞地に菊花文を描いている。内底面には二重圏線の中に五弁花文を描く。底部は蛇の目釉剥ぎの高台である。53は線描きで外面に雲龍文と火炎宝珠、内底面は二重圏線の中に火炎宝珠、口縁部内部に四方禪文を描く。底部は蛇の目釉剥ぎの高台である。

54～86は丸椀である。54～60は外面に松竹梅を描く。59はくらわんかの粗製の椀で、内底面は蛇の目釉剥ぎ、外面に梅樹繫を描く。60は内底面に環状の松竹梅繫、高台内部に「大明年製」と描かれている。61は外面に環状の松竹梅繫文が3箇所描かれる。62～64は松を描く。65～74は草花文を描く。75・76は稲束と草花を描く。77は幔幕に松竹梅、78は幔幕・邸宅・梅を描く。79・80は対称位置に菊と桐、高台内に「久」字が描かれる。81は斜格子文地に菊花を描いている。82は外面に菊文、内底面に宝珠を描く。83は丸の中に「井」を書いた文様を描く。84は丸文と星文を描く。85は外面に丸文、内底面に描く。86は四方禪文に宝文・「凹」字文が描かれる。

87は望料椀の蓋で、天井部に八橋に水草を描き、つまみ内部に角福、口縁部内面に四方禪文、天井部内面に二重圏線内に五弁花文を描いている。

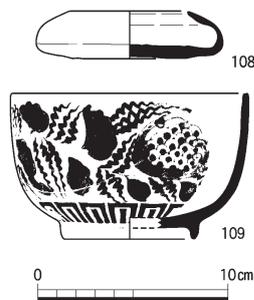
88～90は望料椀で、外側に張り出す高台をもつ。88・89は外面に草花文、高台との境に角張った蓮華文帯、口縁部内面に四方禪文、内底面に二重圏線の中に88は折枝文、89は草花文を描く。90は外面に寿字文、高台との境に角張った蓮華文帯、口縁部内面に四方禪文、内底面に二重圏線のなかに寿字文を描く。

91～107は皿である。91～93は小型の皿で、91・92は内面に山水楼閣文、外面は梅樹繫文を描く。91は92に比べて文様が簡略化され、高台内部は蛇の目釉剥ぎである。93は内面に草文、内底面に五弁花文、外面は梅樹繫文を描く。

94～100はいわゆるくらわんか手と呼ばれる粗製の皿である。94は内面を4区画に分け、竹文と草花文を交互に描く。内底面にコンニャク印判五弁花、外面は梅樹繫、高台内には角福を描く。95は内面を4区画に分け、竹文と宝文を交互に描く。内底面にコンニャク印判五弁花、外面は梅樹繫、高台内には角福を描く。96～99は内面草花文、内底面にコンニャク印判五弁花、外面は梅樹繫を描く。高台内に96は長方形を、他は崩れた渦福を描く。100は見込蛇の目釉剥の皿で、内面に草花文、内底面に崩れたコンニャク印判五弁花を施す。

102～107は大型の皿である。102は輪花皿で、内面に牡丹唐草文に双鳥文、外面は梅樹繫、高台内に「太明成化年製」を描き、ハリ支えのピン跡が5箇所残る。

井戸34



103は内面が蛸唐草に環状の松竹梅繫文、外面は梅樹繫、高台内に角福を描き、ハリ支えのピン跡が3箇所残る。104は輪花皿で、内面が牡丹文に環状の松竹梅繫文、外面は梅樹繫、高台内面に「太明成化年製」を描き、ハリ支えのピン跡が3箇所残る。105は内面を6区画に分け、扇文と草文を交互に描く。内底面にコンニャク印判五弁花、外面は梅樹繫、高台内には角福を描き、ハリ支えのピン跡が1箇所残る。106は大型の皿で、内面にスミハジキに環状の松竹梅繫文の中に雪輪を描き、外面は梅樹繫、高台内にハリ支えのピン跡が4箇所残る。107は

図23 出土土器実測図8
[江戸時代後期] (1:4)

大型の皿で、口縁端部は外方に反る。内面は大きく3区に分け、中央に菊文、両脇に松文を描く。外面は梅樹繫を描き、高台内にハリ支えのピン跡が4箇所残る。

101は美濃・瀬戸のいわゆる「胎白」と呼ばれる陶胎染付の皿で、内面に草花文に五弁花を点で六曜のような文様で描いている。

井戸34出土の土器(108・109) 108は土師質土器の花焼塩壺である。ロクロ成形で、底部に糸切り痕が残る。胎土は精良で、白色を呈する。109は肥前磁器の染付鉢である。

(3) 瓦類(図24～29、図版5・6)

出土した瓦類には、鬼瓦、軒丸瓦、隅軒丸瓦(鳥衾)、軒平瓦、丸瓦、平瓦、棟先瓦(獅子口)、熨斗瓦がある。

鬼瓦(110) 平安時代前期の鬼瓦の右側外区の破片である。内側に唐草文、外側に大粒の珠文を配する。側面はタテケズリ、裏面はタテナデを施す。胎土に砂粒を含み、色調は灰色である。褐色粘質土から出土している。

軒丸瓦(111～118) 111～113・115～117は時計回りの三巴文の軒丸瓦である。111は珠文が16個である。外縁はナデ、瓦当裏面は周縁をナデのちに不定方向のナデを施す。112は珠文が18個で、外縁はナデ、瓦当裏面は周縁をナデのちに不定方向のナデを施す。113はほぼ完形で、長さ29.7cm、幅13.3cm、厚さ2.0cmである。丸瓦部の凸面はタテ方向のナデ調整を施す。凹面は玉縁部に布の絞り痕が残るが、他はヨコ方向のナデの後、タテ方向にも丁寧なナデを施して布目痕を消している。瓦当は内区は時計回りの三巴文、外区は18個の珠文を配し、周縁は広い。胴部に釘孔を有する。瓦当部裏面に円環文を刻印している。115は珠文は14個である。周縁部外端を面取り状にケズリ、外縁はナデ、瓦当裏面は周縁をナデのちに不定方向のナデを施す。丸瓦部外面は縦方向のケズリを0.5cm間隔に施し、裏面には布目痕が認められる。116は珠文は13個である。外縁はナデ、瓦当裏面は周縁をナデのちに不定方向のナデを施す。117は大型の瓦で復元径は26cmである。周縁部外端を面取り状にケズリ、外縁はナデ、瓦当裏面は周縁をナデのちに板状の施具で不定方向のケズリを施す。

114は桐文の小型の棟丸瓦である。瓦当の文様に布目痕が残る。外縁はナデ、瓦当裏面は周縁をナデのちに不定方向のナデを施す。さし部外面は縦方向のケズリを施す。

118は棧瓦の丸瓦当で、時計回りの三巴文をもつ。周縁部外端を面取り状にケズリ、外縁はナデ、瓦当裏面は平瓦当に丸瓦当を接続した時のナデ跡が残る。平瓦当部は唐草文であると思われ、外面は横方向のケズリを施す。

いずれも、胎土は精良で径1mm前後の長石・石英粒、雲母を少量含む。111～113は土坑40、114は現代土坑、115～118は土坑22から出土している。

隅軒丸瓦(119・120) いわゆる鳥衾と呼ばれる隅軒丸瓦である。119は瓦当面は時計回りの三巴文で、珠文は13個である。120の瓦当面は桐文である。どちらも、筒部を粘土紐巻上げによって成形したのちに瓦当部を貼り付けている。外縁はナデのちケズリ、筒部は縦方向のケズリ調

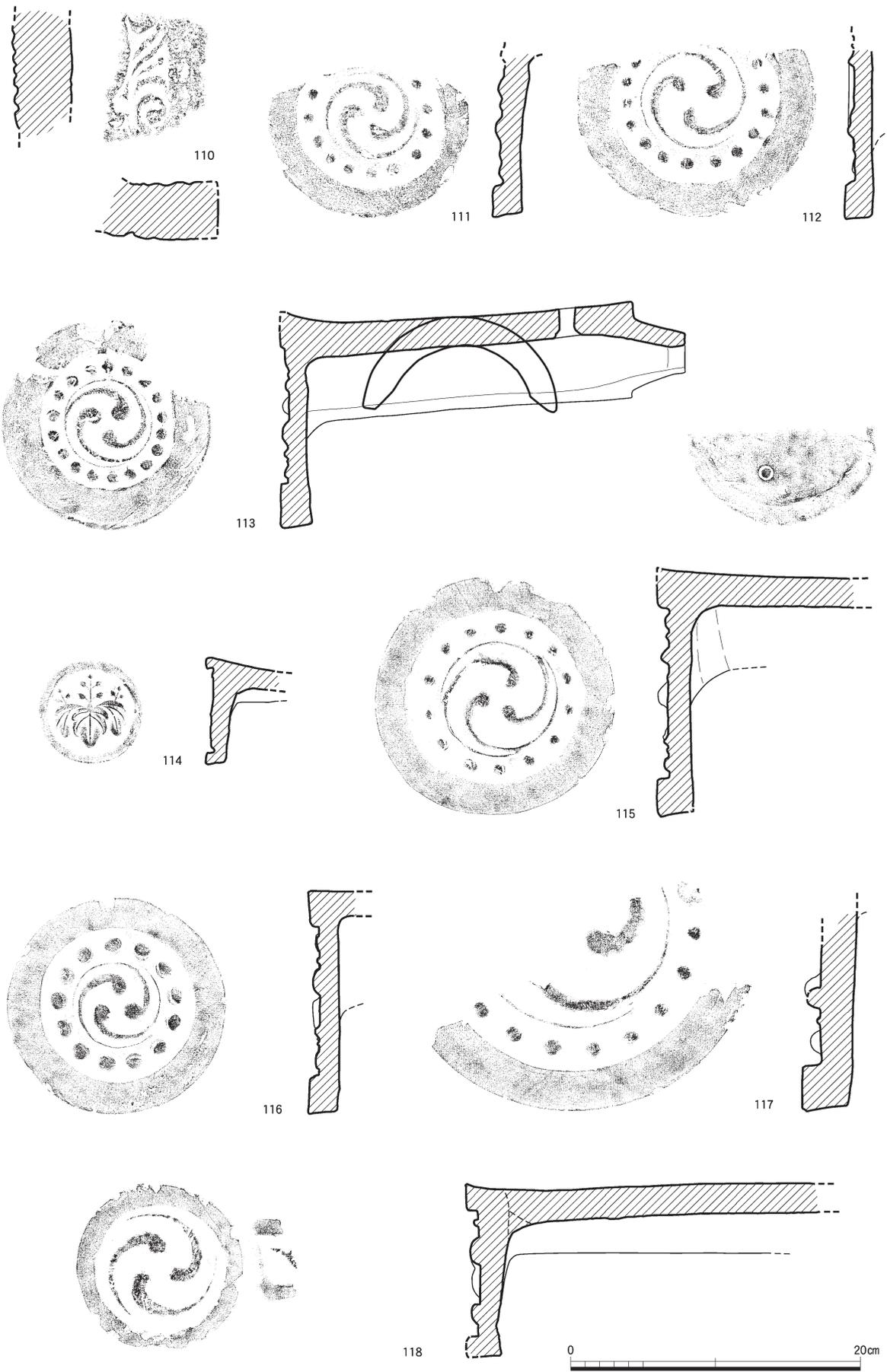


图 24 鬼瓦、軒丸瓦拓影·实测图 (1 : 4)

整を施す。胎土は精良で径 1 mm 前後の長石・石英粒を少量含む。

119 は土坑 40、120 は土坑 22 から出土している。

軒平瓦 (121 ~ 128) 121・123 は均整唐草文、122 は唐草文の軒平瓦である。瓦当部の顎部凸面と顎部裏面はヨコナデを施す。121 は平瓦部の外面はヨコナデ、内面は縄タタキをヘラケズリで消している。124 は大型の軒平瓦で、瓦当は唐草文である。周縁内外面は面取り、顎部凸面と顎部裏面はヨコナデを施す。117 の軒丸瓦とセットになると思われる。

125 ~ 128 は椽瓦の平瓦当部と思われる。125 は均整唐草文で中心飾りは松皮菱である。上辺の周縁の外面を面取り、顎部凸面と顎部裏面はヨコナデを施す。平瓦部の外面は斜め方向のケズリ、内面は無調整である。126 は唐草文の軒平瓦である。上辺の周縁の外面を面取り、顎部凸面と顎部裏面はヨコナデを施す。平瓦部の外面は横方向のケズリ、内面は無調整である。127 は唐草文である。顎部凸面と顎部裏面はヨコナデを施す。平瓦部の外面は縦方向のケズリ、内面は無調整

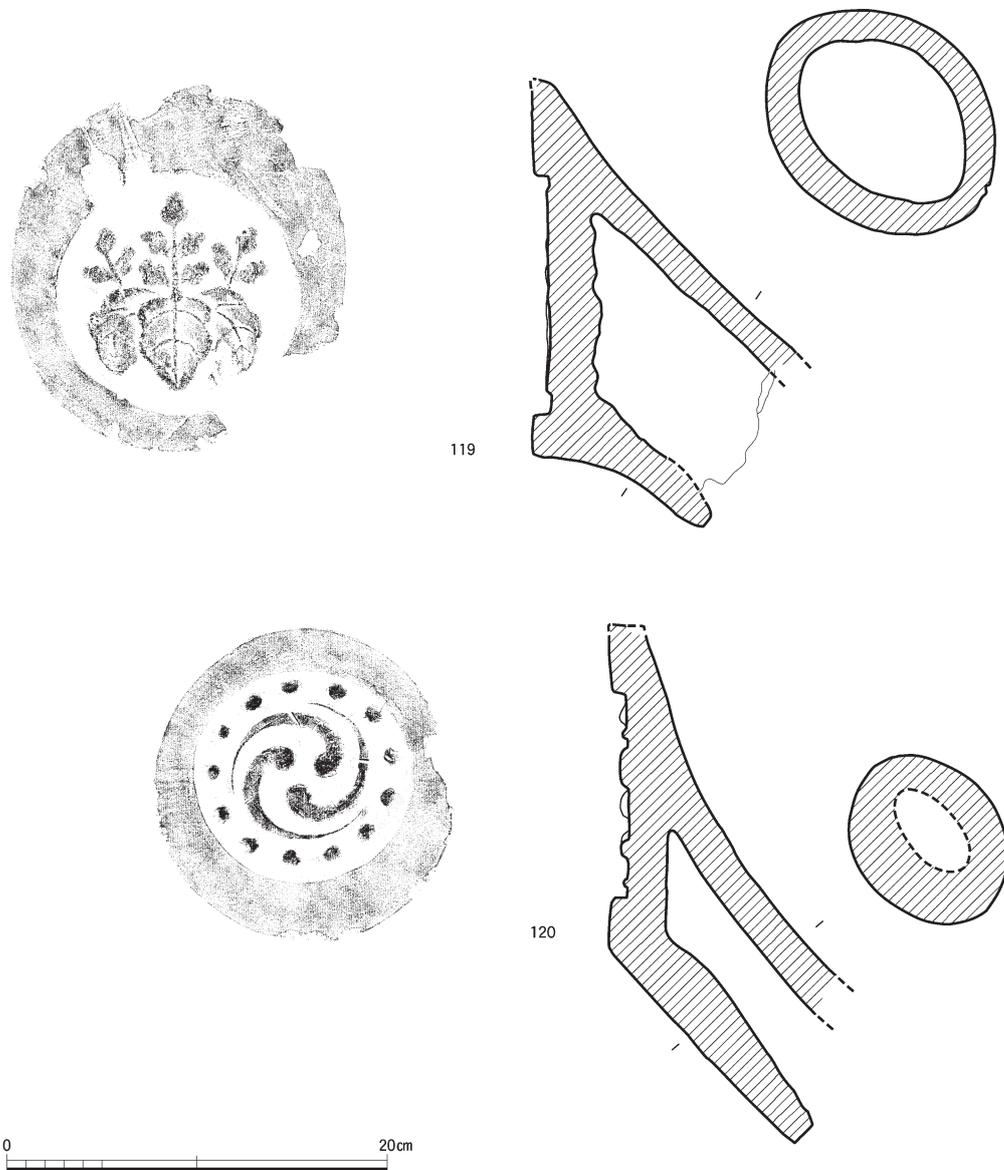


図 25 隅軒丸瓦拓影・実測図 (1 : 4)

である。128 は均整唐草文である。周縁内外面は面取り、顎部凸面と顎部裏面はヨコナデを施す。平瓦部の外面は横方向のケズリ、内面は布目痕を消すためにヨコナデを施す。

121～123 は土坑 40、124～126 は土坑 22、127・128 は井戸 34 から出土している。

棟端瓦(129・130) 129・130 は獅子口形の棟端瓦である。129 は正面と側面の一部が残る。正面・側面とも二条の山形綾筋とその下に宝珠形の綾筋が施される。外面は文様帯を貼り付けたのち、その周辺をナデ、裏面は基本的には無調整であるが一部ケズリとナデを施した箇所が認められる。土坑 22 から出土している。

130 は棟端瓦の左側面である。時計回りの三巴文を 1 個付けている。珠文は 16 個である。正面の綾筋の痕跡は認められるが、側面に認められない。外面は文様帯を貼り付けたのち、その周辺をナデ、裏面は布目痕をヘラケズリによって消している。二条の紐の痕跡が残る。瓦当の中央の他、釘孔が 5 箇所残るが、1 箇所は貫通していない。柱穴 43 から出土している。

丸瓦 (131～133) 131・132 は完形の丸瓦である。131 は長さ 25.8 cm、幅 12.8 cm、厚さ 1.75 cm である。132 は長さ 34.8 cm、幅 16.7 cm、厚さ 2.4 cm である。131・132 ともに玉縁部はヨコ

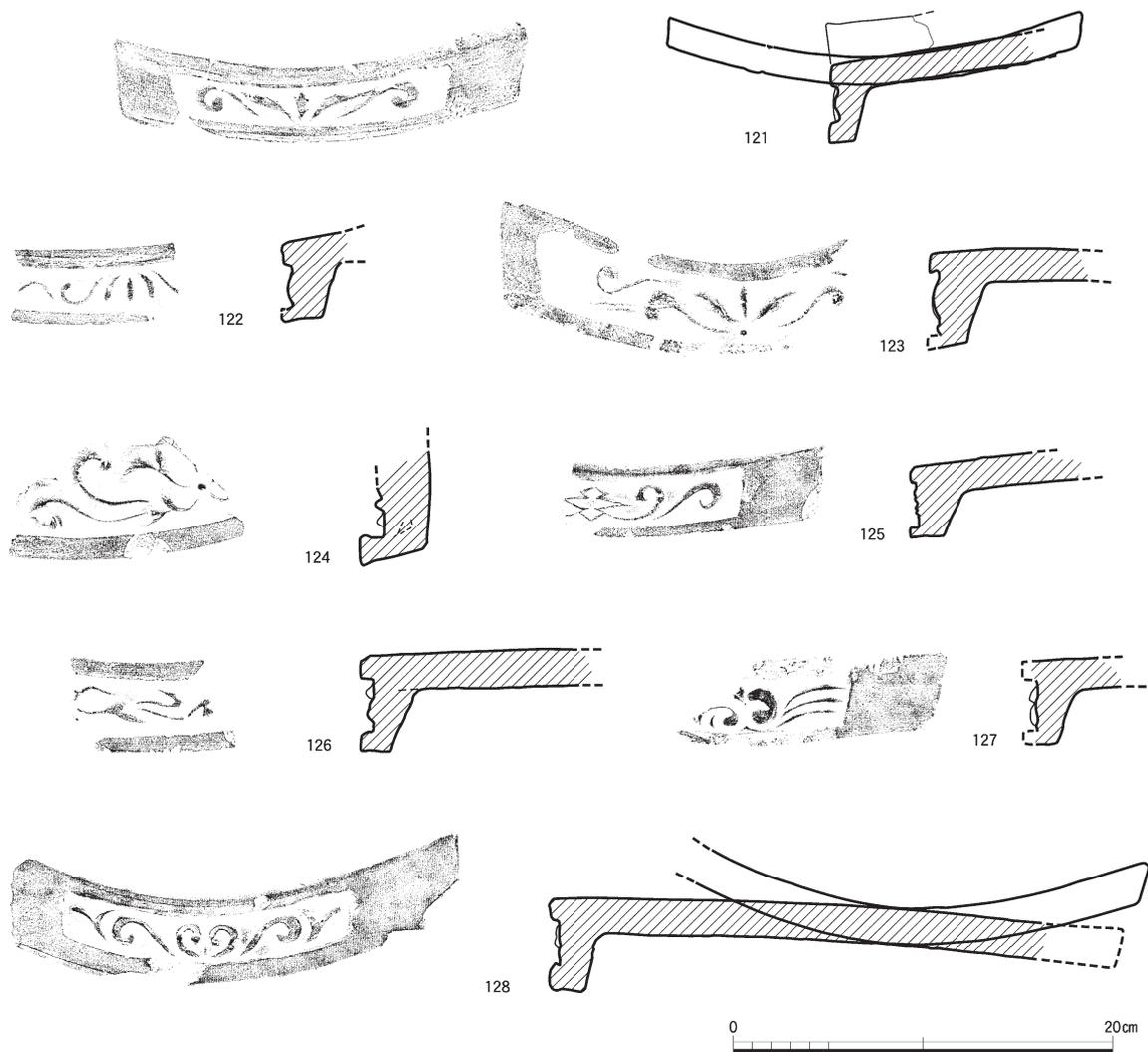
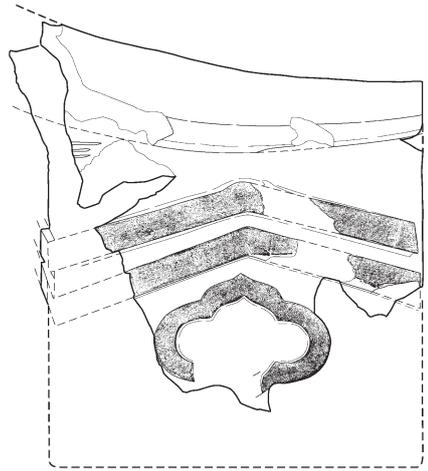
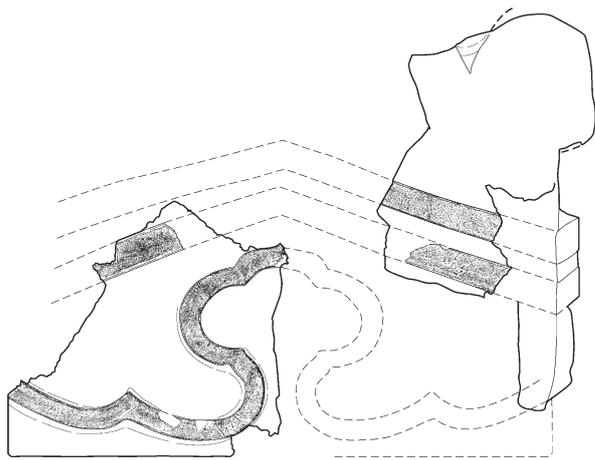
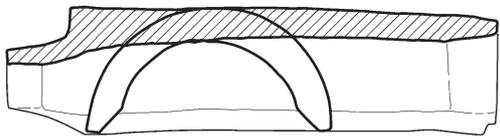


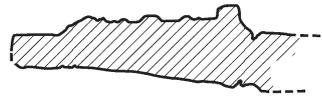
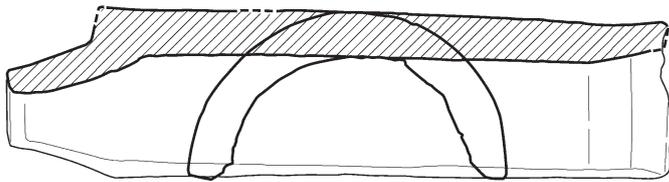
図 26 軒平瓦拓影・実測図 (1 : 4)



129



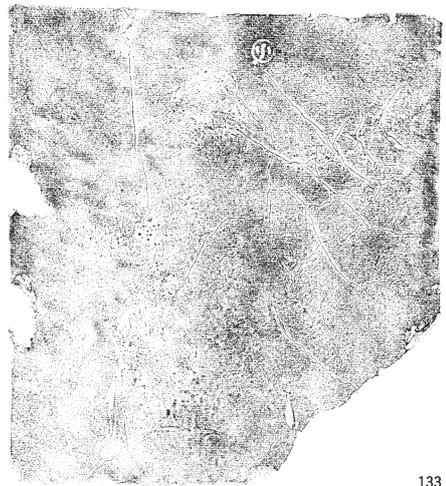
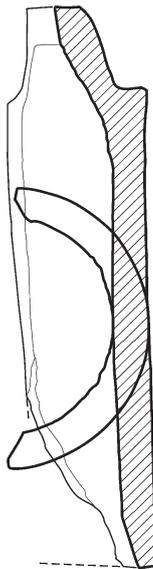
131



130



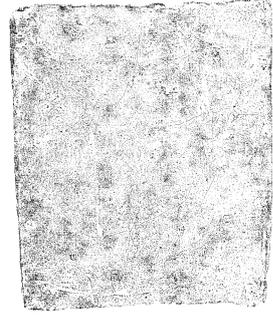
132



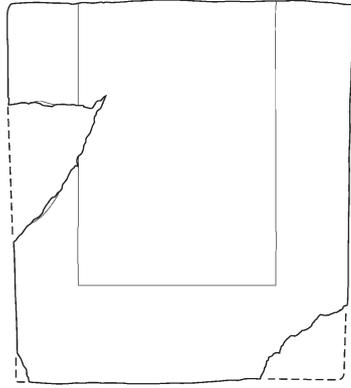
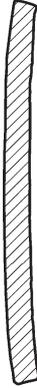
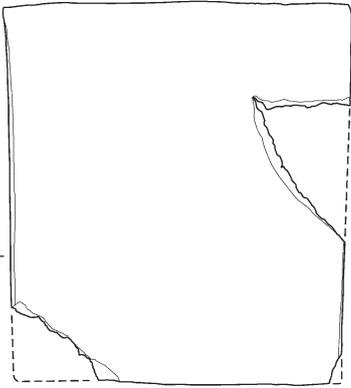
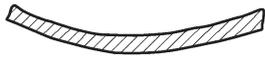
133



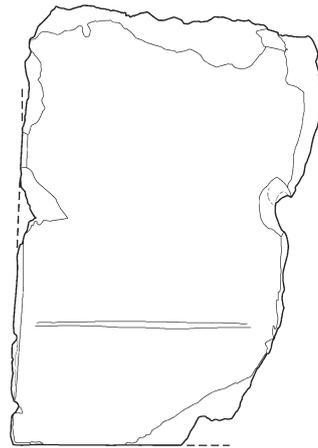
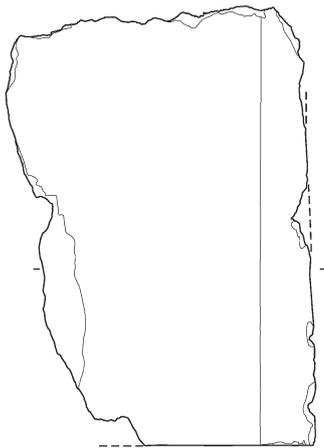
图 27 軒端瓦、丸瓦拓影・実測図（軒端瓦 1 : 6、丸瓦 1 : 4）



134



135



136

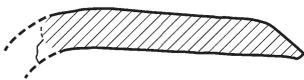


图 28 平瓦、熨斗瓦拓影·实测图 (1:6)

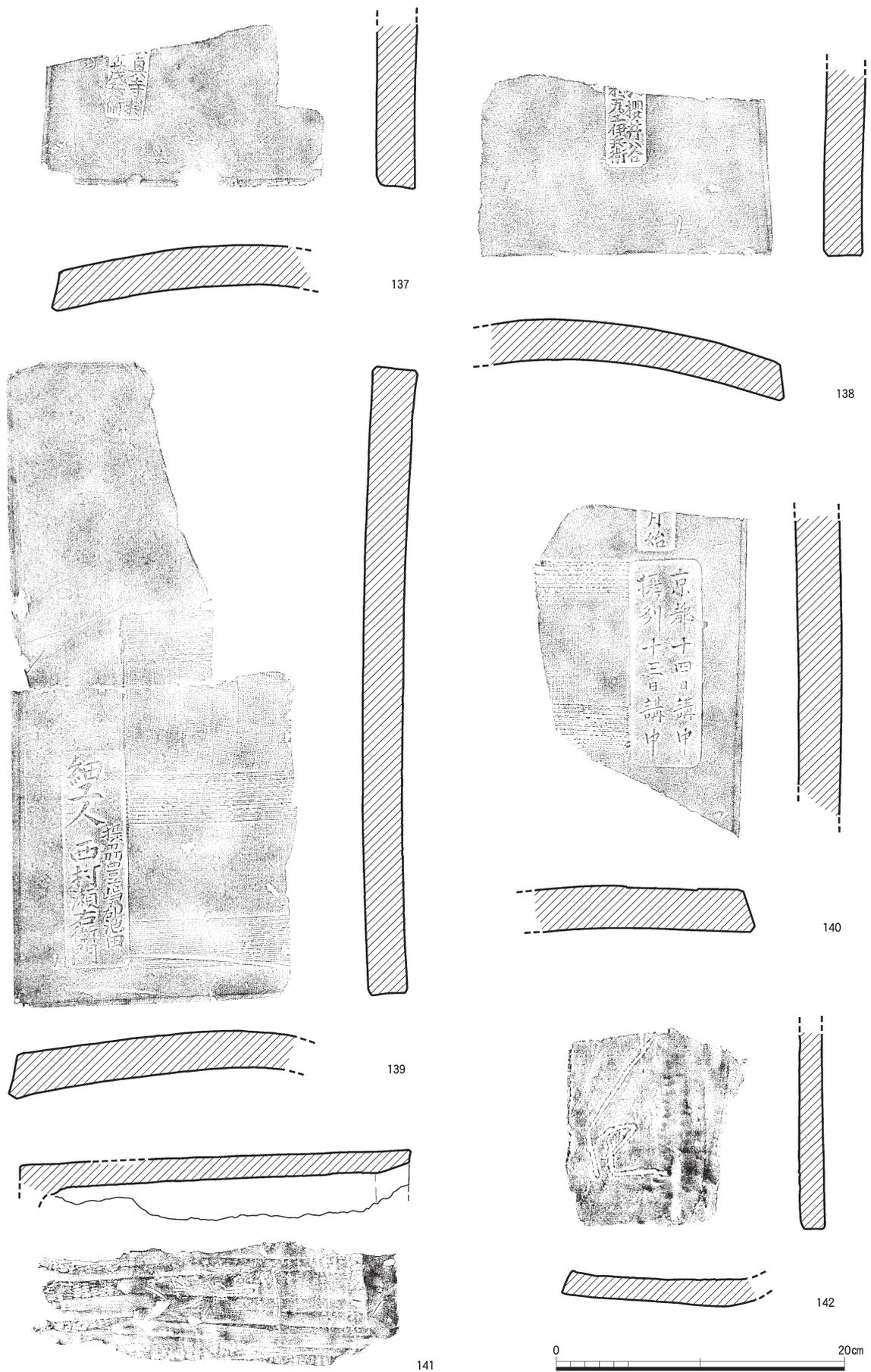


图 29 刻印瓦拓影・実測図 (1 : 4)

ナデ、丸瓦凸面はナデとミガキを施す。丸瓦凹面は布目が残る。端部はヘラで面取りを行っている。133 はほぼ完形で、長さ 29.7 cm、幅 15.1 cm、厚さ 1.85 cm である。玉縁部はヨコナデ、丸瓦凸面はナデとミガキを施す。丸瓦凹面は布目残り縦方向に 5 条のケズリ痕が認められる。丸瓦の尻部に丸の中に「小」字の刻印が押されている。

131・132 は土坑 40、133 は井戸 34 から出土している。

平瓦 (134・135) 134 は長さ 24.3 cm、幅 20.2 cm、厚さ 1.4 cm である。外面は丁寧な布目痕をナデ消している。135 は長さ 30.5 cm、幅 26.3 cm、厚さ 2.1 cm の平瓦である。外面は丁寧なナデとミガキ、内面は端面の一端の側端から幅約 8 cm、両側面は側端から幅約 6 cm の部分を丁寧なミガキを施している。

134 は土坑 40、135 は井戸 34 から出土している。

熨斗瓦 (136) 136 は熨斗瓦である。外面は縦方向のケズリ、内面は布目痕をケズリによって消している。釘孔と思われる円孔が 1 箇所穿たれている。

刻印瓦 (137～142) 137～140 は大型の平瓦に刻印が捺されている。137・138 は丁寧なケズリ、139・140 は内面の下約 3 分の 2 を 3 条の櫛目によって分割し、櫛目の間には布目痕が残る。137 は内面に隅丸長方形の中に「(上部欠) 奥寺村、(上部欠) 茂兵衛」その横に丸の中に「イ」字が刻印されている。138 は内面に隅丸長方形の中に「(上部欠) 櫻井谷、(上部欠) 瓦工伊兵衛」と刻印をする。139 は隅丸長方形の中に「摂州豊島郡池田、細工人西村瀬右衛門」と刻印されている。140 は内面に 2 箇所それぞれ隅丸長方形の中に「(上部欠) 月始」、「京中十四日講中、摂州十三日講中」現存する御影堂の瓦銘によれば 140 の上部欠損部は「文化六己巳天從十一 (月始)」と復元でき、139 の銘文と同じ瓦面に刻印されている。141 は丸瓦凸面をナデ、凹面は一部に布目痕が残るが、縦方向のケズリによって消している。凹面にヘラで「メ四東一」と描かれている。瓦葺きの番付を記したものであろう。142 は平瓦の外面にヘラで文字と思われるものが刻まれているが、判読不明である。外面は粗いケズリ、内面は丁寧なケズリとミガキを施す。

140 は遺構検出中、137～139・141・142 は井戸 34 から出土している。

(4) 金属製品 (図 30、図版 4)

小刀 (143) 反りのない鉄製の小刀である。全長 31.55 cm、刀身 23.3 cm、茎 8.25 cm、刀身の幅は関付近で 2.1 cm、切先の近くで 1.4 cm、刀身の棟幅 0.7 cm である。茎幅は 1.65 cm、茎の棟の幅は 0.6 cm である。棟区 (むねまち) は直角で、刃区 (はまち) は緩やかである。関から 3.5 cm の所に目釘孔が穿たれている。目釘孔と関とのほぼ中央に、高さ 2.3 cm、幅 2.0 cm、厚さ 1 mm の銅製の「はばき」が残っている。土坑 22 から出土している。

銭貨 (146・147) 146 は北宋銭の「至道元寶」(初鑄 995 年) である。147 は明銭の「洪武通寶」(初鑄 1368 年)、文字は草書体である。ともに銅製で、土坑 39 から出土している。

(5) 石製品 (図 30、図版 4)

砥石 (144) 短冊型をした、砂岩製の砥石である。短側面を除く 4 面を使用している。溝 31 から出土している。

硯 (145) 長方形で小型の粘板岩製の硯である。土坑 22 から出土している。

(6) 土製品 (図 30、図版 4)

土錘 (148) 土師質の円筒状の土錘である。ほぼ中央に円形の孔をもつ。黒褐色粘質土から出土している。

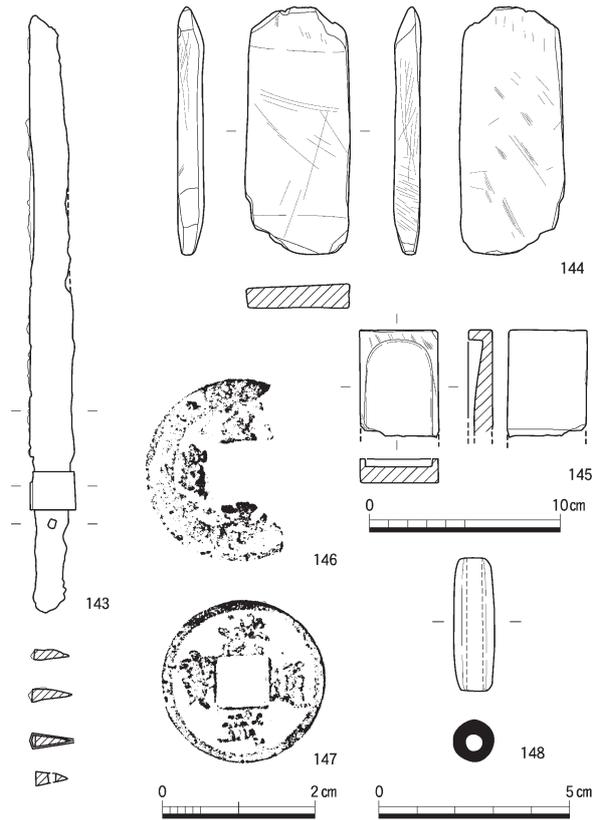


図 30 金属製品、石製品、土製品拓影・実測図
(1 : 4、1 : 1、1 : 2)

5. ま と め

今回の調査によって、古墳時代から本願寺創建を経て現在に至るまでの土地利用の変遷の一端を明らかにすることができた。調査区で検出した最下層はすべて砂礫層で、調査区全体が自然流路上であったことが確認された。砂礫層からは古墳時代前期の庄内併行期の土器が出土している。中には北陸地方の影響を受けた甕がみうけられ、他地方との交流があったことがわかる。

平安時代末期から鎌倉時代の遺構は、遺跡の保存が不可能な箇所のみで限定された調査であったが、溝などを検出した。溝は幅 1.7 ～ 1.8 m、深さ 0.6 ～ 0.7 m の断面が台形のもので、1 町を南北に二分するものである。他に土坑を検出した。

本願寺の創建にあたって造成がなされ、表面を厚さ約 5 cm の黄灰色粘質土で化粧された可能性がある。創建時の造成土を覆って元和三年の火災の時に生じたとみられる焼土が含まれている整地層が検出され、寛永十三年の御影堂再建に際して整地されたものと考えられる。

この整地面の上で、建物の礎石の据付け穴とみられる土坑を検出した。土坑には方形と円形の二種類がある。方形のものは一辺約 1.0 m で、埋土は砂礫層とその上を土を被せて搗き固めたものの互層である。円形のもの径約 1.2 m で、肩部を巻くようにシルト質の土を入れ、中を礫と瓦を含む砂質土で充填し、上面に栗石に使用されたと思われる花崗岩の割石を敷いたものもある。方形の礎石の据付け穴をもつ建物は 2 棟（建物 1・3）で、建物 1 は東西 2 間以上（芯々距離 3.0 m）、南北 1 間以上（芯々距離 6.0 m）である。建物 3 は調査区の南東部で礎石の据付け穴を南北に 2 箇所検出した。円形の礎石の据付け穴をもつ建物（建物 2）は、一列 4 間分（芯々距離 3.0 m）を検出した。いずれも全体の構成・規模は不明である。建物同士の直接の切りあい関係はないが、建物 2 の据付け穴には漆喰が含まれているので、建物 1・3 より新しいと考えられる。建物 2 は、18 世紀後半の遺物を含む土坑が埋まった後に、建てられた可能性が考えられる。

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきほんがんにけいだい・へいあんきょうさきょうしちじょうにぼうろくちょう(ひがしいち)あと							
書名	史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊六町(東市)跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2007-18							
編著者名	木下保明							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせきほんがんにけいだい 史跡本願寺境内 へいあんきょうさきょう 平安京左京 しちじょうにぼうろくちょう 七条二坊六町 (ひがしいち)あと (東市)跡	きょうとししちぎょうく 京都市下京区 ほりかわどおりはなやちょう 堀川通花屋町 さがるほんがんにもん 下る本願寺門 ぜんちょうちない 前町地内	26100	A702	34度 59分 27秒	135度 45分 06秒	2007年8月 13日～2008 年3月28日	400m ²	参拝部棟 建替
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡本願寺境内 平安京左京 七条二坊六町 (東市)跡	史跡 都城跡	平安時代末期 ～鎌倉時代	溝、土坑	土師器、焼締陶器、輸 入陶磁器、瓦器、瓦、 石製品、土製品				
		室町時代	井戸	土師器、輸入磁器				
		桃山時代末期 ～江戸時代前期	土坑、柱穴	土師器、焼締陶器、施 釉陶器、輸入磁器、瓦、 銭貨				
		江戸時代中期 ～後期	建物、瓦列、土坑、 井戸	土師器、土師質土器、 施釉陶器、軟質施釉陶 器、磁器、焼締陶器、 瓦、金属製品、銭貨、 石製品、土製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-18
史跡本願寺境内・
平安京左京七条二坊六町（東市）跡

発行日 2008年3月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961